

# 「神の知恵がさばきをするのを見た」

副牧師：松坂 政広

<列王記上 3章16節～28節 新共同訳>

---

<メッセージ>

導入 ソロモンあれこれ

サウルが40年、ダビデが40年治めた後、ソロモンがイスラエルを40年の間治めることとなります。神さまが彼に非常に豊かな知恵と英知と海辺の砂浜のような広い心を与えられたので、彼は、3000の箴言を語り、1500首の歌を詠み、箴言、コヘレトの言葉、雅歌を遺しました。彼の知恵を聞くために、すべての国の人々や、すべての王がやって来ました。おびたしい数の民を治めるのに知恵が必要でしたが、それほどのせっかくの博学が用いられなくなった最大の理由は、700人いたという彼の妻たちが、彼の心を他の神々の方に向けさせたからですね。彼は40年の間、ことに晩年、みこころに沿ってイスラエルを治め切ることはなりませんでした。民に重い税と強制労働を課し、自らは偶像礼拝におぼれていきました。国を守るとか、神殿や王宮を建てるとか、貿易に力を入れるとかに力を発揮はしても、肝心のところでみこころから逸れてしまうところは、彼も罪人の例外ではありませんでした。ソロモンの功罪は、120年続いたイスラエル王国を北イスラエルと南ユダに分裂させてしまうことにつながりました。わたしは、王国をあなたから必ず引き裂く。と神さまに言わせることとなります。これが、列王記のテーマでもあるわけですが。今朝は、ですからあくまで、人の知恵ではなく、神の知恵に注目してみたいと思います。

本論1 ソロモンの知恵1

主が約束を果たしてくださることを願って、父ダビデがソロモンに遺したことばは、主のみ前を歩むことでした。

ソロモンにとって、主のみ前を歩むことは、主と対話することでした。主が、ソロモン王に、「あなたに何を与えようか。」と訊ねると、「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください(3:9)。」と応えました。この願いは主のみこころにかなうものでした。夢の中でのやりとりでしたが、この願いは、神に聞き入れられました。神さまは、ソロモンの願ったとおりにしてくださったのですね。

8月の最後に、ラインで57名の皆さんにお送りしたみことばは、「まことに神は、私の

救いと願いを、すべて、育て上げてくださる。」でしたが、実に神さまは、ソロモンの願いを、ことごとく育て上げてくださったのですね。

このことを象徴する出来事に、今朝は目を向けさせていただいています。

罪や悪は人と人の間に存在します。主は、暗闇の中に住む。と新改訳で列王記の8：12に訳されている暗闇は、他の訳の聖書では、黒雲となっていて、神さまの臨在の場所を表わすものというのですが、そのことは、神さまが、人間とは全く隔絶した存在であることを表わすだけではなく、人と人の間に存在する暗闇にも介在してくださることを言っているんですね。そのことに今朝は注目しようとしています。主が主の名を置くとはまた、そういうことでもあります。それは、単に白黒決着をつける、というようなものではなくて、すべての人の心を唯一ご存知の方が、人と人の間に介在されて、当事者たちが、互いをあわれんで、主の元に立ち返る。帰ることが目的だからですね。

ある時、シェバの女王がソロモンを訪ねてきました。有名な話ですね。シェバというのは、アラビアの南西にあった国というのですが、エジプトとエチオピアを支配した女王とも言われる彼女が、直接会って話を聴くまでは、その半分ほども聞き及んでいなかった。と言ったそうですが、そうですよね。彼女は、数々の難問を用意してソロモンの知恵を問うとしたのですが、息も止まるばかりになったといいます。彼女は、心にあったすべてのことを彼に質問しました。ところが、王がわからなくて、彼女に説き明かせなかったことは何一つなかった。というのですね。ですから、シェバの女王は、ソロモンに知恵を受けた神を信じるにいたった、というよりは、ソロモンの背後におられる神さまをほめたたえざるをえなかったというのですね。ところが、そのやりとりの中身は一切記されていませんが。ある時、ソロモン王が大宴会を開いて、東西の諸王を招いた際に、シェバの女王もやってきて、三つの謎を問いかけたそうなんです。1. 地から湧くのも天から降るのでもない水。2. その頭を嵐が駆け抜け、それは、身も世もなく泣きわめく。自由な者はそれを褒め、貧しき者はそれを恥じ、死せる者はそれを尊ぶ。鳥は喜び、魚は嘆く。3. お前の父は、私の父、お前の祖父は私の父です。お前は私の息子で、私はお前の姉です。ソロモンの答えは、1. 馬の汗 2. 亜麻 3. ロトと二人の娘、だったそうで。なぜか自体も、その答えもなんだかさっぱりわからない感じがすけれども。

その意味でも、今朝の実話は、主が授けられたソロモンの知恵がどんなかを知る上で、鮮明で貴重かと思われませんが。

## 本論2 ソロモンの知恵2

26節のふたりの言い分を聴いた王は宣告を下して言いました。「生きている子どもを初めの女に与えなさい。決してその子を殺してはならない。彼女がその子の母親なのだ(3：27)。」ひとりには、「生きているのが私の子で、死んでいるのはあなたの子だ。」と言い、また、もうひとりには「いや、死んだのがあなたの子で、生きているのが私の子だ。」と言う。真実を知る者は、このふたりの女性と神さましかいない中、神の知恵がソロモン王のうちにあって、このふたりの女性の間立って、彼がさばきをするのを人々は目の当たりにしたのですね。ふたりの女性の間にあった障害を神さまは見事に取り除かれました。

今朝、説き明かす必要があるのは、神が授けた知恵に対して、二人の女性から引き出した26節の応答にあるのかもしれないですね。

実の母親は、この子をあわれに思うあまり、とありますが、これは、この子を見て胎が温かくなって、と記されていて、10月10日の間胎児がぬくもりを感じた母の胎が実の母親を証していると言っている感じです。それに対して、もう一人の女性は、もともと、自分が引き取って責任をもって育てるつもりなどなかった。彼女のうちにあった思いが、生きている子どもを引き裂いてほしいという表現となって表わされた。という。

## 結び

主が授けてくださる知恵には、わたしたちのものの方の見方を変えてくれるものであったり、わたしたちの姿勢をみことばを通して変えてくれるものであったりします。

八海山の100年そば、100年の間、受け継がれてきたそばがカコノミライというBS朝日のThe Nextというドキュメント番組で「持続可能な暮らしへの道しるべ」というテーマで紹介されていました。そこに八海山があるから、やってこられた。そこを訪ねる山伏たちが、五穀断ちをしているので、米や麦が食べられない。だから、美味しいそばを食べてもらおう。ということで100年続いてきたというんですね。長く続くには、理由があるんですね。今のご主人は、そば打ちを息子に任せているというのですが。その息子さんは、特に教えてもらったわけではない。というんですね。その見事な蕎麦打ちのわざは、子どものころから音を聴いてきた。映像より音だ。と言っていました。ずっと寝食を共にする家族の次の世代が、幼少より聴かされてきた蕎麦打ちの音で、匠のわざを受け継いでいっている。これを聴いて、牧師家庭に育った次世代に関するわたしの視座が変わった気がしました。これまでは、牧師家庭に育ったからといって、やはり神学校に行かなければ、牧師にはなれない。と考えていましたが、もちろん、そうですが、やはり牧師家庭に育って、そこで見聞きしてきたことがどんなに大きいかにか眼が行ったわけです。

「わたしは待つのが嫌いです。待つことは時間の無駄です。という方が、飛行機に搭乗して席についたら、すぐに離陸するようにしてほしい。レストランで食事を注文したら、すぐに料理を運んでほしい。待っていると、怒りや不満、絶望的な気持ちさえ感じるのです。」というのですが。/この方の家がハリケーンの被害を受けた時に、甥っ子が自分が修繕をしてくれると言ってくれたそうですね。けれども、2週間経っても、待っても、一向に始まらない。被害が大きくなかったので、修繕は早く済むと思っていたそうですが。待たなければなりません。ところが、待っているうちに、預言者イザヤを通して、「待つのは良いことだ」と主が語っておられることを学んだというんですね。主に望みを置く人、すなわち主を待ち望む人は、新たな力を得ると。この方は、いらいらしながら待つ身から、主を待ち望む態度へ変えられました。待っている間に主が働いていてくださる！そうやって、待つことに対して、主が眼を開いてくださったというんですね。主を待ち望む時、時間を無駄にはしていないのですね。

主は、わたしたちにどんな知恵を授けてくださっていますか？授けてくださろうとしていますか？楽しみですね。神の知恵を証する者でありたいですね。

<列王記上 3章16節~28節 新共同訳>

そのころ、遊女が二人王のもとにきて、その前に立った。

一人はこう言った。「王様、よろしくお願ひします。わたしはこの人と同じ家に住んでいて、その家で、この人のいるところでお産をしました。」

三日後に、この人もお産をしました。わたしたちは一緒に家にいて、ほかにだれもいず、わたしたちは二人きりでした。

ある晩のこと、この人は寝ているときに赤ん坊によりかかったため、この人の赤ん坊が死んでしまいました。

そこで夜中に起きて、わたしの眠っている間にわたしの赤ん坊を取って自分のふところに寝かせ、死んだ子をわたしのふところに寝かせたのです。

わたしが朝おきて自分の子に乳をふくませようとしたところ、子供は死んでいるではありませんか。その朝子供をよく見ますと、わたしの産んだ子ではありませんでした。」

もう一人の女が言った。「いいえ、生きてるのが私の子で、死んだのがあなたの子です。」

さきの女は言った。「いいえ、死んだのはあなたの子で、生きてるのがわたしの子です。」二人は王の前で言い争った。

王は言った。『『生きてるのがわたしの子で、死んだのはあなたの子だ』と一人が言えば、もう一人は、『いいえ、死んだのはあなたの子で、生きてるのがわたしの子だ』と言う。』

そして王は、「剣を持って来るように」と命じた。王の前に剣が持って来られると、

王は命じた。「生きてる子を二つに裂き、一人に半分を、もう一人に他の半分を与えよ。」

生きてる子の母親は、その子を憐れに思うあまり、「王様、お願ひです。この子を生かしたままこの人にあげてください。この子を絶対に殺さないでください」と言った。しかし、もう一人の女は、「この子をわたしのものにも、この人のものにもしないで、裂いて分けてください」と言った。

王はそれに答えて宣言した。「この子を生かしたまま、さきの女に与えよ。この子を殺してはならない。その女がこの子の母である。」

王の下した裁きを聞いて、イスラエルの人々は皆、王を畏れ敬うようになった。神の知恵が王のうちにあって、正しい裁きを行うのを見たからである。